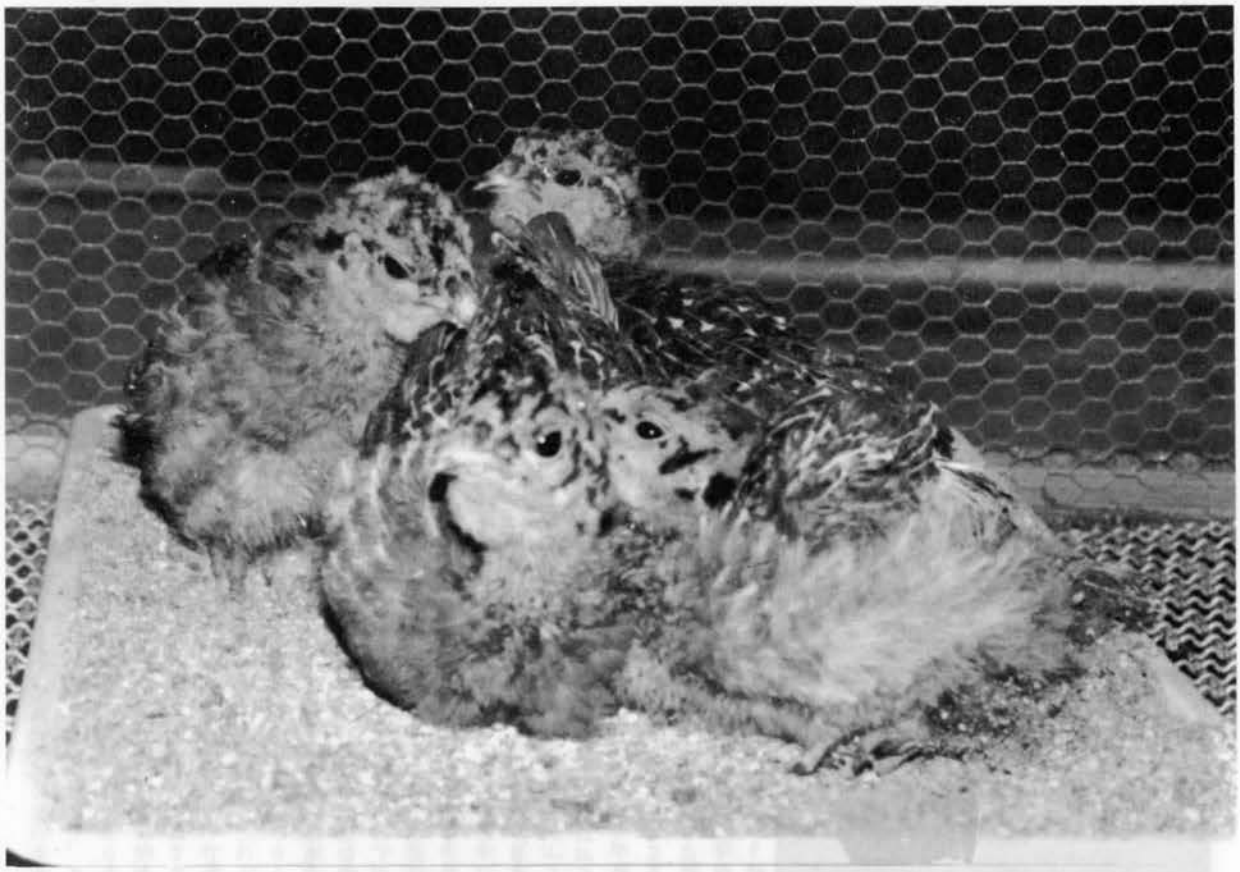
山と博物館

第32巻 第6号　1987年6月25日　大町山岳博物館



砂あびをするオオライチョウのヒナ（23日齢）

オオライチョウと友好

五月五日子供の日、オーストリア・インスブルック市長から大町市長宛のメッセージと共にオオライチョウの卵が贈られた。

「親愛なる市長そして市民の皆様

インスブルック・アルプス動物園25周年を記念してインスブルックの写真家と子供達による写真絵画展が大町市で催される事になりました。同時に、アルプス動物園の園長から大町山岳博物館にオオライチョウの卵を贈呈いたします。

この機会を利用し、親愛なる市長様と大町市の皆様にチロル州・州都インスブルックより心からのご挨拶を申し上げます。大町市がインスブルック市に対して示して下さる多大なる関心には、当市では非常に注目されています。

市長様を代表とする大町からのご一行様が私共を訪問下さった事は、とても良い思い出となっております。再びインスブルックでお目にかかれる事を楽しみにしています。敬具

インスブルック市長
ロムアルド・ニーシャー

大町市長
高橋恭男様」

大町山岳博物館では大町市とインスブルック市の友好提携3周年とアルプス動物園25周年を記念してさまざまな記念行事を催している。

本号の〝世界のライチョウ〟は行事の一つとして催されたハンス・アッシェンブレンナー博士の講演会の要旨である。博士は西ドイツでオオライチョウの保護増殖を進めているライチョウ研究者で、アルプス動物園ヘルムート・ペヒラーナー園長との協同研究者である。今回のオオライチョウの卵もご自身で運んで下さった。

贈呈された卵からは4羽の雛が誕生し順調に育っている。このまま元気に成長して動物親善使節の役割をはたしてくれることを心から願っている。（山岳博物館長　平林国男）

世界のライチョウ

ハンス・アッシェンブレンナー

去る五月九日、山岳博物館講堂で行われた西ドイツのライチョウ研究家ハンス・アッシェンブレンナー博士のスライドを使った講演を、日本語訳で編集してご紹介します。

私はハンス・アッシェンブレンナーと申します。皆さまにお会いできて光栄です。

日本でもライチョウの研究発表がいくつかありますが、最近では羽賀さんらがエゾライチョウについて、また山階さんがカマバネライチョウについての労作を発表しております。また大町山岳博物館ではオーストリアのアルプス動物園や私どもと協力してオオライチョウの飼育と繁殖にとりくんでいます。

ライチョウは独立したライチョウ科に属しており、すべての種類が北半球に分布しています。体重はいちばん小さなエゾライチョウで約四〇〇グラム、キジオライチョウで約三キロ、オオライチョウとなるとこれの二倍くらいになります。外観上のオス・メスの区別は、例えばオオライチョウやキジオライチョウのようにはっきりしている種類と、エゾライチョウのようによく似ている種類、冬のオジロライチョウのように区別がまったく不可能な種類があります。

ライチョウのからだは寒い気候帯に適しています。例えば足の羽毛やツメは雪上生活に適しています。消化器系統のしくみでは、固いくちばしで固い木質化された餌を摘みとり、嗉嚢にため、強い筋胃で小さく砕き、盲腸で消化します。またその行動も厳しい環境によく適応しています。例えばエゾライチョウは冬は一日のうち二〇～二二時間も雪穴の中ですごします。

それではいまから世界に分布する十数種類のライチョウをそれぞれご紹介します。

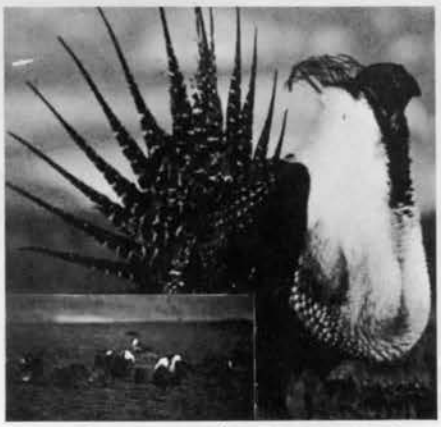
オオライチョウのオスとメス（左下）

オオライチョウ

ヨーロッパ大陸の内陸部やスカンジナビアからソビエト内陸部などに分布するオオライチョウは非常に密集した森林にすんでおり、森林の鳥としてはいちばん大きいと思います。冬期は松柏類、夏期は草や木の芽や花や木の実などを食べます。先ほどもいいましたが、オスとメスの区別はこの鳥の場合はっきりしています。繁殖のためには広い地域と古い樹林帯を必要としますが、いちばん強いオスがやはりいちばんよい場所を占領します。オスどうしがメスを奪いあって闘いをするときには、頭を低くした状態で背中を相手に向かって傾斜させ、とじた尾をまっすぐに立てます。冬期は一日一四～一五時間は雪穴の中で生活しています。

キジオライチョウ

これはアメリカ・ロッキー山脈の高地で撮ったキジオライチョウのいわば集団見合場所です。このような見合は非常に狭いわずか数平方メートルの範囲で行われます。ライチョウは総じて繁殖の時期になるとオスがナワバリをもつのですが、他のオスが自分のナワバリに侵入してくると絶えず喧嘩となります。繁殖期のオスは首のところにある空気ぶくろから重苦しい短い音を出します。空気ぶくろは頭をひっこめた状態で動かし、その早さは電動カメラでも写せないほどです。ところでキジオライチョウはセージライチョウともいいますが、なぜこう呼ぶかというと一年を通じて食物の九〇％くらいがセージという植物（ヨモギ類の雑草）だからです。



キジオライチョウ（♂）と集団見合（左下）

つぎに高山やツンドラ地帯を生活圏とするライチョウ属を紹介します。

ライチョウ

ニホンライチョウの仲間にあたるライチョウとヌマライチョウは、氷河時代後期が終わっても消え去る氷河とともに北へ移動することなくそのまま高山地帯に残った氷河期の遺残動物です。ライチョウはツンドラ地帯の高所にすみ、オスは灰色がかった羽の色をしておりメスは黄金色です。餌は高山植物です。ライチョウ属の仲間だけが冬になると白の冬衣をつけますが、ライチョウは目のところに黒い大きなすじがあるのが特徴です。ヌマライチョウは極北やツンドラの低所にすみヤナギの芽を主食にしています。オスは冬には目の黒いすじが消えてしまいます。

エリマキライチョウ

これはカナダとアメリカに分布するエリマキライチョウで、ポプラ林の中に多数の集団ですんでいます。オスは他のオスに対してエリマキのように首の羽を立てて自分を誇らしげに見せるのでこの名がついています。ふつうライチョウは繁殖期になるとせわしげに飛んだりはばたいたりして自分のナワバリを示しますが、このライチョウは朽ちた木の上などではばたくだけです。しかしその音は太鼓をたたくような独特の音です。

エゾライチョウ

ヨーロッパからアジアに分布するこのライチョウは先ほどのエリマキライチョウと同属です。オス・メスの外観の区別ははっきりしませんが、オスはわずかにノドが黒いのが特徴です。繁殖期のナワバリ争いがはじまると、オスの様子はひじょうにかわってきます。自

エゾライチョウ(♂)

分のナワバリを見張るために高いところにとまり、他のオスに対して自分を大きく見せるために首や胸の毛を立て、メスを誘うためにメスの前で尾羽を開いたり飛んだりすばやく動きまわります。巣は地上の草地につくり、メスが巣からはなれるときは卵が見えないよう草でおおいます。ヒナは赤茶色をしていて、ちょっとした黒いすじが耳のあたりに見えます。手入れをされていない広葉樹林がすみかです。同じ仲間に中国にいるムナグロエゾライチョウがあります。研究発表がとても少なく長いあいだ西ヨーロッパでは絵でしか知られていませんでしたが、中国のシアンティン先生に昨年スライドをいただき、はじめて写真で紹介されました。

ソウゲンライチョウ

北アメリカの草原地帯にすんでいますが、数がかなり減ってワシントン条約で保護されています。オスたちは繁殖期になると喧嘩をしながら自分のナワバリを守ろうとします。これは堂々とした姿のオスで首に空気ぶくろが見えます。耳のあたりに注目してください。角のように羽を立てているのは興奮状態です。

その他のライチョウ

北アメリカ大陸の北部に分布する**ホソオライチョウ**です。広い開けた地域にいますが、しげみや森林にいることもあります。

これは数が激減したソビエト・コーカサス地方の**コーカサスクロライチョウ**です。広い地上を好みます。遠くからでもよく目立つ白い尾羽が特徴です。

数が少ないといえば最も少ないといわれているのがアムール川やウスリー江附近にすむ**カマバネライチョウ**です。カナダに分布する**ハリモミライチョウ**とは先祖が同じとされています。

これは東シベリアのエニセイ川の東側にすむ**クロハシオオライチョウ**、これはカナダにいる**アオライチョウ**です。繁殖期になるとオスは羽をこまかくはばたかせながら地上から木、またはその逆に飛びうつり自分のナワバリを誇示したり、メスの前で数秒間尾羽を開いて自己宣伝をします。

スコットランド地方にいる**アカヌマライチョウ**です。この地方は雪がひじょうに少ないので冬に色はかわりません。また樹木も少なくヒース（ツツジ科エリカ属の各種の小かん木）が唯一の餌です。

ソウゲンライチョウ(♂)

最後にロッキー山脈の高地にすむ**オジロライチョウ**です。このライチョウは人間を知らないのですぐそばまで近寄ることができました。これは標準レンズで一メートルまで接近して写した写真です。

オオライチョウの人工増殖

私どもは長年ライチョウの人工増殖にとりくんでおります。オオライチョウの場合、飼育舎はいくつかの部屋を組合わせたものが基本となります。例えば三つ組合わせた場合、中央にメスをいれ両側にオスをいれて、仕切りにメスだけがどちらのオスにも近づけるように直径一八センチの通り穴をつくります。床は自然状態ではなく病原菌を予防できるようにしておきます。例えば網板で、これが美観上はともかく最も衛生的ですので、ヒナがかえって五〇日間はこれを使います。また金網の外側の下の部分には目隠しをしておきます。これは近くをイヌやネコが通っても、彼らが驚かないようにするためです。

ライチョウたちは飼育下で自分で卵をかえします。これが温度や湿度といった環境とヒナたちの体重にとって理想的です。しかしときには母ドリが途中で卵を抱かなくなる危険があります。飼育には人工飼育と自然飼育があるわけですが、確実なのは人工飼育で、私どもの場合、ヒナの九〇%ほどが成育しています。生後一日目は〇・五平方メートルの小さな飼育箱の床にしわにした湿ったタオルを敷いて、ヒナが足をすべらさないようにします。生後二週間を過ぎてからは大きな飼育箱にいれて野外におきます。餌はできるだけ自然のものを与えます。

ハリモミライチョウ(♂)

自然飼育の場合、ほとんどのライチョウが自分でヒナを育てるわけですが、母ドリの気分がわるくて育てなかったり、ヒナが餌を食べなかったりで死んでしまうこともよくあります。こうして母ドリに育てられたヒナは人に馴れていませんので動物園での飼育には向きません。そこで生後三～四ケ月した九月ごろになると生息地である森林地帯に放します。放鳥したオオライチョウでも、大雪などはじめて経験する冬の困難にも大丈夫です。このような野外に放したライチョウを観察していますとひじょうに喜びが湧いてきまして、それまで難しい問題にぶつかってきた苦労を忘れてしまうほどです。

長らくご静聴ありがとうございました。

（注）記述にあたってライチョウの和名は「世界の鳥の和名」（山階鳥類研究所）に準じました。

霊松寺のオハツキイチョウ

―市指定の天然記念物に―

宮田　渡

1　はじめに

霊松寺（大町市大字大町六六六五―イ）には葉上にギンナンを着生する（写真）いわゆる「オハツキイチョウ」の木が二本ある。その一本は山門の南西に、他の一本は、お稲荷の南にある。

葉上にギンナンができる事実がはじめて紹介されたのは明治二四年、山梨県身延町の上沢寺（じょうたくじ）のイチョウで、紹介者は白井光太郎博士であった。その後、各地でオハツキイチョウが発見され、それぞれ天然記念物に指定されている。長野県では長野市篠ノ井瀬原田のイチョウと上水内郡小川村瀬戸川のイチョウが県指定の天然記念物となった。

2　霊松寺のオハツキイチョウ

山門前のイチョウは胸高周囲二〇八cmであるが、この上部で幹が二叉（ふたまた）している。二叉点での周囲は、南側一一八cm、北側一五〇cmである。そして、お稲荷南のイチョウの胸高周囲は一九五cmである。ともに推定樹齢八〇―一〇〇年である。この二木にまつわる記録は何も残されていない。

オハツキのギンナンは次のようにしてできる。オハツキのもとになる葉を「栄養大胞子葉」といい、まずこれに切れ込みを生ずる。次に切れ込みの底に「大胞子のう原基」を生ずる。これが生育していってギンナンになった場合、オハツキギンナンになり、このようなものを生ずるイチョウの木を「オハツキイチョウ」と呼ぶ。普通のギンナンが「大胞子のう托」という専門の柄に着生するのとは根本的に異なるのである。

霊松寺のイチョウでは普通のギンナンが、九〇%、オハツキギンナンが一〇%である。そして、オハツキギンナンには様々な変化がみられる。一葉上にギンナンが一つ着生するものが最も多いが、なかには三つも四つも着生するものがある。

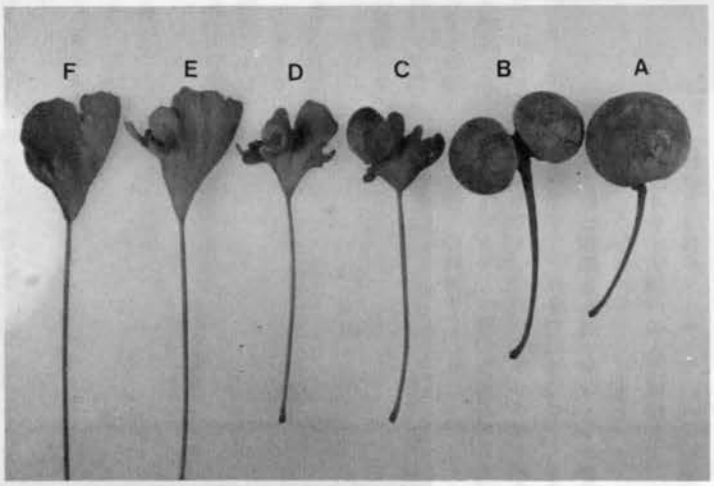
3　オハツキイチョウの重要性

写真のBはオハツキの葉片部が委縮退化して、通常のギンナンに酷似するものである。このような例をみると、歴史的には葉にギンナンが生育していたものが、長い年月の間に葉柄がギンナン専門の托柄に変ってきたことを思わせる。

向坂説によると、オハツキは遺伝的なものではなく、地下の水分通達量によって決まるという。枝にも水分通達量のちがいが現われるからオハツキのできる枝と、できない枝とを生ずることは霊松寺のイチョウでもみられる。学術上のいろいろな観察が今後期待できるので市指定の天然記念物として保護していくのがのぞましい。

（大町高校教諭）

文献
向坂道治（一九五八）『イチョウの研究』風間書房（東京）
宮田　渡（一九八一）「霊松寺のオハツキイチョウ」山岳博物館友の会『ゆきつばき』八号



霊松寺のイチョウ：A通常のギンナン、B葉片部がなくなったオハツキギンナン、CD―葉上にギンナンが一つ着生したもの、EF大胞子のう原基が発育しなかったもの。

博物館だより

不破章作品展（7月19日～8月23日）**の開催**

不破章画伯（一九〇一～一九七九　日展審査員・日本水彩画会理事長・一水会審査員など歴任）は、北アルプス山麓、ことに大町から白馬にかけての自然と人情をこよなく愛され、五〇余年にわたってこの地に足を運び四季の風景を画題にされました。その確実な透明描法と高度なデッサン力で、画伯は日本の水彩画壇を背負う代表的な存在でした。

今回信濃美術館の協力で、すでに大町市に寄贈された二〇余点を含む約一〇〇点の画伯の作品を一堂に会します。ぜひご来館ください。

（期間中無休　通常料金）

資料寄贈ありがとうございました

地図　1点　大町市社　曽根原文平
マツカサ　1点　上福岡市上野台　牧　潤一
木こり道具　19点　大町市俵町　飯島英男
クマの頭骨等2点　大町市五日町　北沢繁美
スキー道具　1式　大町市神栄町　中沢清市
紡績道具　2点　大町市厚生事業センター
イノシシ剝製　2点　堀金村岩原　小池　宏
女子エベレスト隊記録写真　3点　読売新聞東京本社
山岳模型　1点　高崎市飯塚町　平野勝司
（敬称略）

山と博物館第32巻第6号
一九八七年六月二十五日発行
発行所　長野県大町市　TEL㉒〇二一一
大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町　大糸タイムス印刷部
定価　年額一、二〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野四―二二九二）